

宮沢元首相死去 また一人消えた良識派

2007 年 6 月 29 日

二十八日死去した宮沢喜一元首相は、戦後自民党一党支配下の最後の内閣総理大臣であると同時に、ハト派政治家の代表格でもあった。故後藤田正晴氏に続いて良識派政治家がまた一人減った。

宮沢氏を形容して「ハト派」「護憲」「戦後政治の証人」「良識派」「秀才」などの表現が使われた。

同氏は旧大蔵省の官僚時代に故大平正芳氏(元首相)とともに池田勇人蔵相の秘書官となり、サンフランシスコ講和会議に吉田茂首相に随行するなど、戦後政治の枠組みづくりに深くかかわった。吉田首相の特使となった池田氏に随行し、日本の防衛力整備をめぐる池田・ロバートソン会談の通訳を務めた。当時の経緯を記録した宮沢氏の著書「東京－ワシントンの密談」は、戦後政治の裏面史を物語る名著である。

学生時代に渡米したこともあり終始親米とみられたが、戦後の占領時代を回顧して宮沢氏は「あんなに悔しかった時代はない」とも語っていた。単なる親米ではなく、福沢諭吉の「独立の気概」を大事にするという点では、骨っぽさを持った「親米・ハト派」だった。

「平和憲法」「議会制民主主義」「軽軍備」「自由主義経済」を柱とする吉田政治の保守本流路線を終生尊重した宮沢氏にとって、近年の小泉、安倍両内閣における改憲ムードの加速は、苦々しいものだったに違いない。宮沢内閣当時の一九九二年にPKO(国連平和維持活動)協力法の制定にかかわったのはハト派宰相としては歴史の皮肉だったが、「海外での武力行使は、いっさいしないというのが現憲法の原点だ」との姿勢を晩年まで貫いた。

九一年、首相の座に就いたときは「生活大国」づくりを掲げたが、政策の具体化を手がける前に金丸信自民党副総裁への五億円献金事件など政治腐敗についての対応に追われ、内閣不信任決議案の可決－小沢一郎グループの離党－総選挙敗北で自民単独政権最後の首相となった。

首相退陣後に自ら会長を務めていた宏池会を加藤紘一氏に譲ったが、結果的に派閥の分裂を招いた。「知の政治」においては大きな功績を残した半面、「力の政治」では十分な実績を残せなかったのが宮沢政治の実像だろう。

戦後六十二年にして政治に限らず、日本社会全体が保守化、右傾化している中で、いま本当に必要なことは、戦後民主主義の良さを継承し、悪い点を是正していくという冷静な論議である。そのような時に宮沢氏のような良識派政治家を失ったことは、損失といわざるを得ない。